
当方見聞録

千村 宗則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

当方見聞録

【Nコード】

N7675V

【作者名】

千村 宗則

【あらすじ】

主人公「千村青葉」は、扉の前で出会った女性「国枝奏」と共に異世界旅行へと旅立つ。最初の世界は、江戸そっくりだった。元の世界に戻るには、この世界最強の侍王を倒す必要があった。最期の瞬間、侍王から伝えらる最悪の真実。青葉は、無事にもこの世界へ戻れるのだろうか。

プロローグ（前書き）

初めてで駄文だと思いますが、どうか読んで評価をお願いします。

プロローグ

そこは、机と椅子が並べられただけの簡単な会議室。

そこは、シンと静まっでいて、他者の侵入を許さない。間違つて人が入ってこようものなら、あまりの異様さに腰を抜かすだろう。何故なのか？それは・・・そこで会議をしている者達をようく観察すると分かる。

胸より下が無いのだ。まるで、銅像。そんな中、一人の男が口を開いた。

「——それより、本当なのか？アレがもうすぐ誕生するといふのは？」

自分の左の奥にいた男に問いかけた。

「そうですね。そうになると、こちらも手を打たなければな。」

その言葉に、一人の男を除いて、全員が頷いていた。全員が拍手をする中、この男は、他の四人をにらみつけていた。その姿に気づいた一人の男が声をかけた。

「どうなさったんじやい？キリク殿。」

sideキリク

俺はこいつらが生まれたときから、大嫌いだった。ここに生まれてきた自分が嫌いだった。ここは、俺にとっての生き地獄。他人にぶら下がりながら生きていくせに、その他人を嘲笑し、少しでも反抗する素振りを見せようものなら、直ぐにでも処刑する。俺は、家の立場から助ける事もできず、ただ目を伏せている事しかできない。

「どうなさったんじやい？キリク殿。」

コイツとて例外ではない。時が過ぎれば、やがてモノは朽ちる。

それは、人間とて例外ではない。こいつも一緒だ。自分の立場を利用し、自らの幸福のみを願い、行動する。まだ遅くはない。坂本に頼んだ作戦が実行されれば、新しい世が来る。誰もが誰かのためでなく、誰も^の為に生きていく世界。

その為には、強くなり、誰よりも民の心を掴む事。それが今のボクの目標だ。その為には、こいつらからの信用も掴む必要があるな。

「ああ、いや、何でもない。ただの立ちくらみだ」

あの人^が言っていた。「信じる^{こと}、何よりも、誰よりも。それが、何にも勝る重要な事だよ。」だから、きつといつか僕も救われる……。

特別対応委員会 報告書

・人外魔鏡^{じんがいまきよう}の処置^{しちし}について

国内の王たちに通達し、門の使用の規制。それに、王たちへの特別召集を行う。この時、王たちは、自慢の兵隊を集める事。

注意 このことは他言無用である。

プロローグ（後書き）

眠かったので、ちょっと分かりづらい内容かもしれませんが、この話は、誰かに助けを求める謎の少年「キリク」の普段の生活を書いたものです。

第壱話　く扉は開かれたく（前書き）

異世界ファンタジーですが、最初に言っておきます。とりあえず、この世界では、魔法は使いません。主人公の心の葛藤や苦しみをテーマとして、物語は進んでいきます。初めてで上手く書けるかは、分かりませんが、ご愛読よろしく願います。主人公が強かったりするの、多少、目を瞑ってください。

第壱話　　扉は開かれた

第

壱話　その扉は開かれた

僕の目の前を腰に刀をぶら下げた商人風の男が歩いていく。

こんなこと君に言ったら多分、笑いながら僕を怒るんだろう「嘘つきは悪い子なんだよ」って。

でも、これは本当のことなんだ。あれは君の病院から帰る途中だった・・・。

ビルに挟まれたいつもの場所に寄ろうとしたんだ。

そうしたら、あのビルの隙間に、ドアがあっただ。

何とかして通ろうとしたんだけど、ドアが邪魔でぜんぜん通れなかった。

僕がドアと悪戦苦闘していると後ろのほうから声が聞こえてきた。

「おっ！ やつと見つけたぜい、トビラ君。」

えらくハイテンションで、僕は、そのテンション高めな女の人から距離を置こうとした。

すると、そのハイテンションな女の人僕の方へジャンプしてきた。距離にして、50メートル。ありえない。

「そ、そんな!？」

50メートルも後ろから跳んだはずの女の方は、すぐ後ろまで来ていた。そうして、逃げようとしていた僕を見つけたのだろう。ガシツと僕の肩を掴んできた。

「ねえ、君も旅行者？ならさ、ならさ、私と一緒に行かない？」

彼女は、僕の肩をつかんで、グワングワンと揺すりながらボクに問いかけてきた。一緒に行かないってどういう意味だ。冷静に考えれば、このドアをくぐろうという意味だが、このドアを越えてもあるのは、むこうの神社だけだ。

「あ、自己紹介してなかったわね、私は国枝奏。くにえだそうキミは？」

「え、えつと、千村青葉です。」

ここで、こんなにも怪しい人に本名を告げるのはマズイと思ったが、不意ながらいつもの癖でつい本名を名乗ってしまった。すると奏さんは、またもや、僕の肩を持ってゆすり始めた。

「そう。じゃあ、青っち君。君も旅行者なら持つてるよね？旅行許可証。何級？」

どうしようこの人の話の三割ぐらいしか伝わってこない。とりあえず、【聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥】を実践。

「あの、旅行許可証って何なんですか？つウグ。」

この言葉を聞いた奏さんは、揺すっていた僕の肩を急に放した。つまり、地面に軽く叩きつけられたんだ。

「ハハハ、面白い冗談だな。ホレ。」

急に奏さんが、服をたくし上げ始めたので、何をしようとしているのか分からずにとりあえず、止めに入ろうかと迷っていると、奏さ

んのへその辺りに紋章^{エンブレム}があつた。

渦の周りに球体が浮かんでいて、中央に？と書いてあるものだ。

「これ、旅人？級許可証。その顔を見る限り持っていないわね。あゝあ、クソ。またやつちつた。これで、もうおしまいだ。旅人？級許可証じゃ、どこにもいけないじゃない。」

【異世界旅行者規範 第一条

その存在を知られるなかれ。知られた場合は、その者の許可証を永久剥奪とし、狭間へと永久に追放する。又、存在を明かした相手が十五歳以下の場合は、降級処分のみとする。

追記 同じ旅行者同士のみに限り、存在を明かす事を赦す。】

ブツブツと独り言を言いながら、自分を責めている奏さんに申し訳なくなり、謝ることにする。

「あゝ、スイマセンでした。」

「ああ、いいのよ。完全にこっちのミスだったし。」

とはいえ、やはりこちらにもそれなりの非がある。あそこで直ぐに意味が分からない。とでも、言つて置けば、奏さんも話すことはなかっただろう。

決めた。これはボクが換わるためにもなるはずだ。

「ここに書いてありますよね、追記で。つまり、ボクも旅行者になればいいんですよ。だから、連れて行つてください。旅行に！」

「あ、アンタねえ。こっちは、規則を破って降格させられそうなの、

だから・・・」

「でも、旅人になっちゃえば、一般人じゃなくなりますよ。」

考え込む奏さん。ポクポク・・・。

「分かったわ！でも、泣き言は言わないでね。じゃあ、行くわよ。」

奏さんが、あのドアに手をかける。ガチャリ。扉が開いた瞬間、意識が途切れる。それでも、体が宙に浮いているような不思議な感覚が身体を襲っている。

次に、目が覚めるとそこは・・・江戸のような場所だった。

第壱話　く扉は開かれた（後書き）

まだまだ全然で文章も台詞も下手ですし、更新のスピードも遅いですが、温かい目で見守って下さい。

第貳話 墜ちた場所は江戸！？（前書き）

長らくお待たせしました。毎日ここには、来るけど時間が無くて、
少しづつしか書けなかったんです。まあ、というわけで、

第貳話 墜ちた場所は江戸！？

僕が今、立っているのは、小高い丘のような所。辺りを一望してみても、ここが江戸そっくりだということ。

「でも、ここが丘でよかったな。結構、いるんだぜ。頭から町に落ちてくるやつ。」

「そうなんですか、じゃあ、ラッキーだったんですね、僕ら。」

・・・ダレ？奏さんは、俺の横でまだスヤスヤ寝ているし。

「だ、誰ですか、貴方は！？」

俺の後ろで囁きかけてた人物は、僕の目の前に座ると酒盛りを始めた。

「誰ですかって聞いてるんですよ、僕は！！」

「・・・・・・・・」

まさかの完全無視。っていうか、この人よく見るとすでに顔が赤い。

「お前もこの夕日、見に来たのか？良いよな、ここ。」

どうやら、夕日を見に来たらしい。確かに、ちらほらと酒を片手に寝転んでいる人がたくさんいた。

「確かに良いわ。なんて言うの、癒されるって感じ？」

なぜか、奏さんも出来上がっていた。まさか、酒のにおいで!?

「にゅええ、てゅみゅらくんもねころがってみなよ!」

「なぜ、最後にラップ口調なんですか奏さん。ホラ、行きますよ。」

最近見たテレビの警察のおじさんたちを思い出しながら、奏さんをひきづって行く。

「まあ、待ちなよ。キミさ、どこに行くのか分かってる?」

少々、顔の赤いオジサンが僕たちを引き止めた。確かに、奏さんが回復してくれないと行き場が無い。

「わ、分らないです。」

「そうか、なら君もコップを持って、ホラ!」

抵抗しようとする何故か怒られた。まだ15なのに。

——それから十分後。

周りにいたおじさんたちが酔いつぶれていた。しかも、僕に酒を勧めてきた人なんか、にやけながら走り回っている。

「アレ、もうこんな時間ですか?あの、もしかして、私だけ寝てた?」

やっと、奏さんが回復した!

奏さんの腕を取り、帰ろうとしたときだった。

ガコンッ。

「おいおい、見せ付けてくれんじゃん」

「さすが兄貴っす、カッコいいっす」

南蛮風の服を着た三人組の男が近くにあった街灯を蹴ってやってきた。見るからに不良のようだ。

というより、威嚇してきたこいつがカッコいいって目腐ってんのか？

「てめえ、目腐ってるってどういう意味だ、コラ」

どうやら、心の中の声が聞こえていたようだった。

「だった。・・・じゃねえぞ。おちよくってんのか」

「兄貴、こいつたたんじまいましよう」

カチャリ。二人が鯉口を切る。（鯉口を切るとは、少し刀を出して抜きやすくすること。）

二人は、俺の腰の辺りを見て、ニヤニヤしていた。俺に武器が無いと思っっているのだろう。

俺は、落ち着いてバッグの下のほうを探る。握りなれた感触を見つけた。

「なあ、あんた達さ、俺、武器持つてるけど良いの？手加減しないよ。」

「なめてんじゃねえぞ。」

舍弟二人組みがスラリと刀を抜いた。どちらかというと安めの刀のようだった。

俺もバッグから武器を取り出した。出てきたのは、長めの十手。

「そんなんで、俺らに勝てるわけねえだろ。」

スツと目を閉じて、静寂な世界に身をゆだねる。コトリ、石の動く音と共に走り出す。音を置き去りに・・・

振り下ろされた刀を横飛びしてよけ、背後から十手を振り落とす。背後へ飛ぶと、横から刀が突き出された。突き出された刀を十手で弾き、水月（みぞおちのこと）を十手の先で突く。

パチパチパチパチ。

奏さんが、周りで酔っ払っていたおじさんたちの拍手を浴びていた。

後ろを見ると、引くに引かれなくなった兄貴分の人が、刀を抜いて振り下ろそうとしている瞬間だった。

その時、信じられないものを見た。さっきの顔の赤いオジサンが、刀を受け止めていた。一升瓶で。

「誰だよ、アンタ。邪魔すんなよ。舎弟二人もやられて、黙って見ているわけにはいかねえんだよ。」

酔っ払いのおじさんが、チラリとこっちを見た。

「それ以上やるなら、この俺が相手になろう。この侍王、坂本又烙が！」

・・・ジオウ？

奏さんが、寄ってきた。

「あの侍王を倒せば、この世界から次の世界に行けるのよ。つまり、

旅行者の最終目的ってこと。」

「マジで・・・？」

この日、世界を統べる王と僕は、出会った。

第貳話 墜ちた場所は江戸！？（後書き）

戦闘シーンも何もかも、まだまだですけど読んでみてください。
更新ペースは・・・1週間ぐらいにします。なるだけ、ハイ。

第参話 侍王の名は又烙（前書き）

受験生なんであんまり更新できないですけど、なるべく更新していきます。評価よろしくお願いします。

第参話 侍王の名は叉烙

青葉 side

「あ、あんたが侍王!？」

改めて見てみる。左手には、一升瓶。右手には、なみなみと酒の注がれたコップ。着崩した着物。

「・・・いや、ナイナイ。うん。あり得ない。こんな奴が侍王とか、世も末過ぎる!!」

「・・・そだね。私も無いな、うんうん。」

隣にいた奏さんも頷いてくれた。チラッと前を見ると、この世界の王様が肩を落として、落ち込んでいた。

「・・・あはは、そだね。酒でも飲もつと!」

こいつの酒癖の悪さは、このメンタル面の弱さのせいかな。とりあえず、謝っとくか。

「いや、そのスマン。見た目で判断するとか良くない事だよな。」

「アハハ、そうだろ、そうだろう。人は、見た目じゃないぞ。そうやって、見た目で判断する奴は、人としてどうかと思うぞ、人として。大事な事だから二回言ったからな。」

謝った瞬間に回復してきやがった。ウゼー!

「そういえば、僕が墜ちてきた時に何処に行くかわかってるかって、

聞きましたよね。あれってどういう意味ですか？」

旅人専用の宿でもあるんだろうか。それとも、武器とか防具とかを集めろって事なのか。

「ああ、あれか。旅人専用の町を作ったからさ、そこに行ったほうが良いんじゃないかなと思ってさ。」

「旅人専用の町ですか！？ここまで発達しているなんて。」

横で僕の十手を使って、遊んでいた奏さんが話に入ってきた。
（（この世界でも発達しているって奏さんの世界は、どんな風だったんだろうか？））

「じゃあ、そこに行けば必要なものは、手に入るって事ですか。」

「うん。大抵はね……。ま、そういうことで」

「さようなら。次、会うときは、戦うときですね！！」

そういうと、後ろを向いて、旅人専用の町を目指して、丘を下っていった。途中、何度か誰かの視線を感じたが、どこの誰のものか判別できなかった。

???side

「俺たちの視線に気づくとは、将来有望だな。」

「まだまだ、ガキじゃねえか。取るに足りねえな。」

「……………油断大敵」

「そうだな、誰が相手だろうと油断はいけんな」

青葉は、謎の影たちによつて、新たにリストへと名前を追加されたのだった。

青葉 side

「……………気のせいかな？」

チラリと後ろに気を配ってみると、今までの気配が嘘のように消える。

……………気のせいのはずが無い。確実に人の意思によつて、気配が消されている。

「うにや？どうしたんだい、青葉君。」

「感じませんか？視線。」

その瞬間、奏さんの雰囲気ガラリと変わった。

「そだね、見られてるよね。八時の方向。」

八時の方向？確かに何処かからの視線は感じたけど……
こいつ、何者だ？
ナニモン

??? side

「オイオイ、あの隣の奴、よく見るよ。リストの最上段の奴じゃなかよ。」

「こっちに気づいているようだ、いったん引こつ。相手が悪い。」

「……………不覚」

「ああ、あの人が向こうにいるとは」

その声が辺りに響いたとき、もう影は消えていた。

青葉 side

「……………消えたか？」

「どうしたんだい？ホレ、見えたぞい。」

視線が消えた後、奏さんの雰囲気は、元のものにもどっていた。視線を上げると、旅人専用の看板のかけられた町が目前に広がっていた。中に入ろうとすると、近くにいた無精ひげを生やしたオジサンたちに止められた。

「ここで、許可証を見せて行ってくれ。」

奏さんがへその辺りを見せる。それをじっくり眺めた後、やっと口を開いた。

「よし、通るんだ」

第参話 侍王の名は又烙（後書き）

今回は、謎の四人衆やら侍王の出てくる顔見せな話でした。たぶん、五話ぐらいには、キャラ設定を書けると思います。

というわけで、次回は、「第参話 侍王の遺産」です。

第四話 侍王の遺産（前書き）

親にパソコン取り上げられたんで、友達のパソコン使ってます。
中三の受験生だからって、ヒドイと思いませんか。てな訳で、「第
四話 侍王の遺産」です。

第四話 侍王の遺産

門をくぐるとそこは、まるで僕の元いた「眠らない街」の様だった。町は、ネオンの光があふれていた。外の江戸の渋い雰囲気と違って、ハッキリいって不快だ。

僕は、元の世界が好きじゃなかった。誰かが誰かを食いものにする世界、そんな犠牲の中に成り立っている世界がたまらなく嫌だった。そんな中、僕があの世界で生きる希望を失わなかったのは、君がいたからだ・・・

「・・・おい。あおっち君、あおっちクン!!」

僕が、思い出にふけっていると何の反応もなくて、つまらなくなつた奏さんが顔をペチペチ叩いてきた。そこでようやく我に返る。どうやら、入った瞬間、ネオンの光とともにトリップしていたようだ。

「え、ええ。大丈夫です。それよりもここ、僕のいた世界と同じ感じなんですけど。どうなっているんですか？」

ここ旅人専用の町が、僕の世界と同じような発展を遂げているのは、何かわけがあるはずだ。例えば、この町と江戸のような町は、統治者が違うとか・・・。

「ああ、それなら後で説明してやる。だからとりあえず、装備を整えよう、なっ。」

顔が紅潮するのがわかる。すごいかわいい笑顔だった。いつものダメな奏さんの顔とは違う、普通の少女の顔。そのギャップの差にやられたんだと思う。ただ、こんなところを見られたら...

「あれれ？どうしたんだい少年？顔が赤いぞ。もしかして、お姉さんの笑顔にやられちゃったりなんだり？」

「・・・つつく！そ、そんなことありましえんよ」

か、噛んだーーーー、一番かんだらアカンところで噛んでもたーーーー！！！！

もう駄目だ！超向こうニヤニヤしてるんですけどーーーー。

「そんなに照れなくてもいいのにー。」

ブイツと向こうを向いて、とりあえず奏さんについていく。五分ぐらいすると、奏さんが立ち止った。そこは、「出血の家」ブラット・ホームと書かれた看板が・・・しかも、看板の文字は、ドロリとした赤黒いペンキのようなもので、ちよつと下に垂れそうになっている。

「つつて、待たんかい、コラーー！！ブラット・ホームって怖すぎるだろ。なに！？もう確実に壁ドロドロじゃないですか。つーか、看板んん！なに、コレ？誰の血。もう事件起こしちゃったの？」

俺のイキナリのツツコミに最初は、驚いていた奏さんだったが、少し経つと自分のバッグを漁ると未開封のペットボトルを差し出した。きた。

「ハイコレ。ツツコミお疲れさん。この店は、戦う覚悟のない人立ち入り禁止の店がだから、ああいう感じにしてあるんだ。それにここは、すべての世界で店を出している、いわゆるチェーン店なんだ。」

「ブフォツ、えっと、マジですか？コレで、チェーン店なの、ってか全部の世界ってどういうことですか？」

奏さんを質問攻めにしようとした俺を押しとどめると、奏さんは後で説明するからといって、出血の家の中に入って行った。

「ゲヘヘ、良く来たね姉ちゃん。今日は何が欲しいんだい？ゲヘヘ」
な、なんかよくわからないけど、奏さんが確実に危ない。つつか、ゲヘヘが口癖って捕まっても言い訳できなくね？

——色々と、危ない予感がするので、とりあえず中に入る。

「・・・チツ。あゝハイハイ。スイマセン今日は、もうやってないんで、一生、野郎の入店を拒否させていただきます。ハイ。」

「いや、イキナリ舌うちって何考えてるんですか！？つつか、野郎の入店拒否って良くそれで、チェーン店になったな？」

こいつ、頭おかしいだろ、絶対！
イキナリ入店拒否とか、心が、ココロがああー！。

奥のほうで、奏さんの呼ぶ声がする。

「あおっちゝ、早くおいでよ。何してんの？その人、顔は怖いし、下心全開で迫ってくるけど、それだけだよ。ホラ、早く早く」

下心全開って、この怖い顔で言われたら、笑えない冗談なんですけど。

「チツ。ホラ、通れよ。女が呼んでるだろう。女を待たせるなんて人間のクズだぞ。行つてやんな」

お前が入店拒否したんだろうが！！

心の中でシャウトしつつ、奥へとはいっていく。棚の奥で奏さんの声がする。

「あつ、こつちこつち。これなんかどうよ。」

渡されたのは、紫の布地に桜の花びらが散った模様の着物。ヤベえ、超カッコいい。そんな俺の心が伝わったみたいだった。

「でしょでしょ。これさ、防御も完璧なんだ、でさ、武器なんだけど、あれなんかどう？」

奏さんが指さした先にあったのは、店頭に飾つてある二振りの刀。知ってるか？店頭に飾つてある奴つてなめちやめちや高いんだぞ。

「奏さんて、実は、イトコのお嬢様だったりします？」

「えっ？ウンまあね」

ウンウン。そうそう、そんなはずあるわけないって………つてアレ。

「ほ、ホントすか！」

「うん。国枝グループって聞いたことない？私あそこの会長の孫娘なんだ。」

国枝グループっていや、全世界を股にかける超巨大貿易グループだぞ。その会長の孫娘が奏さん！？全然似合わない。

「キミ、今失礼なこと考えなかった？」

「い、いえ、そんなことは、ありませんよ」

でも、縛り付けて育てられたからこそこの性格だと考えれば、自然なことなのかもしれない。

「まあ、そんなわけだから、お金だけはたくさん持つてるのさ。で？あれは欲しいの？」

「いや、使い慣れている十手で十分です。はい。」

よく祖父ちゃんに言われていた「誰からも何も借りるな」の言葉が頭をよぎる。

「遠慮するなつて、すいませ〜ん」

「げへへ、何だい嬢ちゃん？」

見えなかった。あのクソ店主、光のごとく現れやがった。

「この着物と、あの刀を二つください。」

あの二振りの刀を指さして、財布を取り出す奏さん。だが、その手を静かにおろさせた店主は、こちらを向いて、語り始めた。

「止めといたほうがいい。ありやあな、先代の侍王の持っていた妖刀なのさ。この侍王は、歴代最強と呼ばれるほどの実力者でな、この世界を去る時にこう言ったのさ「この刀は、然るべき継承者が現れるまで誰の手にも触れさせるな」とな。侍王さまが去って以来、多くのものがこの刀に挑戦した。しかし、誰ひとり、この刀に選ばれた者はいない。力が強すぎたのさ。この力にあてられた者は、気が狂い野垂れ死んでしまうのさ。それ故にこの刀は、こう呼ばれている。」「侍王の遺産じおうのいさん」とな」

店主の話を聞きながらブツブツとつぶやいていた奏さんが、あわてた様子で口を開いた。

「もしかしてその人って・・・」

「ああ、その通り歴代最強の侍王であり、誰も成し遂げたことのない偉業を成し遂げた旅行者「千村芽吹ちむいめふき」さ」

「えっ？」

第四話 侍王の遺産（後書き）

さて、千村芽吹とは、誰なのか。パソコンの解放が3月なのですが、友達のパソコンを利用しつつ、物語を進めていこうと思います。

次回「第五話 廻り始める運命の歯車」です。

どうぞ 期待下さい。

第五話 侍王の妖刀（前書き）

今回は、コレと登場人物紹介をやりたいと思っています。
母親が帰ってきたらすぐ終了なんで、どうなるかわからないんです
けど・・・

第五話 侍王の妖刀

「千村芽吹って・・・」

最強の侍王の名前を口にして言葉を失ってしまった僕に不信感を募らせた二人は、ズイズイと近寄ってきた。そして、店主が口を開く。

「アンタ、千村様を知っているのかい!？」

あまりの驚きに首が勝手にコクコクなる。

「ハイ、ソノヒトハ、ワタシノオジイサundes。」

奏さんの方を見ると、スケッチブックを取り出し、こちらに向ける。そこには、【深呼吸してみよう】と書かれていた。その言葉のとおり深呼吸をすると少し、体が楽になった。

「お祖父さんは、11年前に失踪しているんです。それも、二振りの刀を持って・・・」

【それがこの刀なの？ ハイ、答えてみよう。】

どうやら、ショックを受けていたのは、僕だけじゃないようだ。奏さんの方に無言で歩いていき、逃げようとした奏さんの手首をガツチリとつかむ。そして、スケッチブックを取り上げて、一番最初のページを出す。【深呼吸してみよう】

奏さんも落ち着いたみたいだった。

「で、どうなんだよ、実際」

イラついた様子で、こちらのコントぶりを見ていた店主さんが、問いかける。

「どうなんだよ・・・とは？」

「この、刀はそうなのか？芽吹様はお前のおじいさんなのか？」

そうやって、イライラしながら問いかけてくる様子は、少し悲しうでもあった。多分、自分の尊敬していた存在。つまりは、僕のおじいさん、最強の侍王に僕のような子がいることが悲しいのだろう。

「刀は消えたものと同じですから、最強の侍王も僕のおじいさんだと思います。」

僕がそう答えると、最初は、落胆の様子をありありと浮かべていた店主だったが、すぐに嬉しそうな顔になった。

「そうか、ならソレを持っていきな！！店を預かるものとして、売れ残ってるやつは可哀想だね。その二振りの刀も悲しんでいる気がしたのさ。」

僕は、不覚にもこの怖いおじさんを格好いいと思ってしまった。

「それじゃあ、こっちも清算お願いします。」

僕からの返答を持っていた店主と返事をしようとしていた僕、二人でポカンとしてしまった。

どうやら、奏さんは、空気の読めない人のようなのだ。

「え……、あ、ああ、分かった。……刀の代金は要らないから、一千五十万だな。」

刀、つまりこの店で一番高い商品でなくても、この値段。いや、高すぎるでしょ。

僕が、コレを言葉に出せなかったのは、普通に奏さんが、現金で、僕の時代のお金百五万をパツと出したからだった。

「奏さんて、ホントに金持ちだったんですね。ああ、ソレとコレありがとうございました。奏さんは、武器とか防具とか要らないんですか」

「ああ、私は、元の時代から持ってきているから」

何故だろうか、元の世界のことを語る奏さんの姿がとても苦しそうで、いつもの元気な奏さんでなくて、そっと手を触れただけで壊れてしまいそうな儚い誰かだった。

「ハハハ、そろそろ宿に行こうか。」

僕は、奏さんの様子に、言葉を発する事さえ出来なくてただ首を縦に振るので、精一杯だった。

すると、僕の肩に手を置いてきた人がいた。店主さんだった。僕の耳に顔を寄せてきて、「お嬢の事、頼みましたよ」そう真剣な眼差しで告げられた。

僕は、奏さんを追いかけて、走っていった。

——十分後、僕は、ある建物の前に立っていた。【ホテル田淵^{たぶち}】
帝国ホテルみたいな名前の方が似合いそうな、高級ホテルだ。見た
ことのないような高級ホテルに躊躇している僕に代わり、奏さんは、
平然と中に入っていた。

——僕はというと・・・その後ろをコソコソと、つ
いていった。

「支配人はいるかしら、奏が来たと伝えてくれるかしら。」

態度のでかい客に不平そうな顔をしていた、ホテル員は【奏】の名
を聞いて、すぐにその顔を引っ込めた。

「はい、た、只今お待ちください！」

緊張で最後のほうが、裏返っていた。

暫くして、やってきた支配人と思しき人は、奏さんの顔をみて、顔
をほころばせていた。

——正直に言おう、凄く怖いです。何故かって、そりゃあ、「
人殺しなんて遊びだろ」みたいな顔をした人だぞ。そんな人がどん

なに笑っていても、怖いんだよ。

「よくぞ、来られました、奏お嬢様。一番上の部屋が用意してございます。」

そして、その顔に浮かべていた笑みがきえ、ギロリとこちらを向く。

「オイ、ボウズ！！奏お嬢様に手エ出したら、ただじゃおかねえぞ！わかったか！！」

「YES！」

さあ、どうしても、責めてくれ、あんな怖い人にYESとNOどちらかを迫られたら、確実にYESと答えるだろう。今みたいに・・

「ねえ、ちいた智板。早く早く！」

奏さんが、こちらに向かって、手を振っていた。それにチーターさんは、腕が吹っ飛ぶんじゃないかってくらいに、てを振り返していた。

「おら、お前エも行くぞ。」

チーターさんに背負われて、最上階へと連れて行かれた。待てよ？最上階って普通、一部屋しかないよね。どうすんだろ。ウワアアアアアアアアアアーーーーー！！

なんて、一人で悶々としていると、着いたのは、最上階の一個下。で、ニヤニヤしながらチーターさんが言う。

「ああ、ボウズはここだぜ。残念だけどな」

恥ずかしい、顔から火が出るほどに。

一人で、悶々としていたのにそれを見破られた、ってか、期待してたのに・・・

四人衆 s i d e

「・・・・・・ターゲット補足」

「襲撃か、血肉沸き踊るねえ」

「・・・・zzzz」

「・・・・・・」

光の届かぬ深い闇にその闇よりも深い黒マントをはためかせるは、
「黒の四人衆」。青葉は、この四人衆よりお嬢様を守りきれのか。

第五話 侍王の妖刀（後書き）

次話、狙われた奏さんを青葉は、助けぬけるのか。

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。では、どうぞ！

登場人物紹介

千村青葉 15歳 AB型 やぎ座

十手を使った戦闘を得意とする。過去のトラウマが原因で、心から人を信じることの出来ない少年。だが、表面での付き合いは誰にも負けない。祖父は、歴代最強と謳われた千村芽吹。

千村芽吹 65歳 AB型 しし座

二振りの刀を使っていた。歴代最強。以外は、不明。

国枝奏 17歳 B型 うお座

国枝財閥のお嬢様。しかし、それだけではないようで……。武器、防具共に不明。心に鍵をした少女。

智板 ??歳 ?型 ??座

ホテルの支配人。武器は、腰に刺さった短刀か？防具は不明。奏に傾倒している。

店主 22歳 A型 ふたご座

ブラット・ホームの店主、名前は特に無い。武器と防具は、店にある物全て。表面はともかく、実は好人。千村芽吹を心から尊敬していた。

坂本叉烙 35歳 O型 やぎ座

現侍王。酒好きでいつも酒を持ち歩いている。素面でも、酔っている印象を与える。その所為あつてか、実の顔は分からない。

四人衆 ??歳 ?型 ??座

全てにおいて不明。

登場人物紹介（後書き）

こうやって書いてみると、不明ばっかでした。すいません。暫くしたら、戦闘シーンが増えてくる予定なので、そこで武器を探してみてください

それと、何か武器や防具の案のある人は、教えてくださいと凄く助かります。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675v/>

当方見聞録

2011年11月13日07時23分発行